

日蓮大聖人御書全集

べつとうのごぼうごへんじ

別当御房御返事

新版
1204
〜
1205

べつとうのごぼうごへんじ
別当御房御返事

ぶんえいこうき べつとうのごぼう
文永後期 別当御房

しょうみつぼう 文 詳 書 寄 合 聞
聖密房のふみにくわしくかきて 候。よりあいてきかせ

たま せうら
給い候え。

ごと ふたま きよすみ しょうみつぼう もう 合
なに事も二間・清澄のことをば聖密房に申しあわせさせ

たも せうらう せけん 理 知 者 せうら
給うべく候か。世間のりをしりたるものに候えば、こう

もう せうらう しょうとう せうらう
申すに候。これへの所当なんどのことは、ゆめゆめおもわ

せうらう せうらう
ず候。いくらほどのことに候べき。ただ、なばかりに

せうら せうらう
てこそ候わめ。また、わせいつをのこと、おそれ入つて候。

おんこころ 苦 そろろ

いくほどなきことに御心ぐるしく候らんと、かえりて

歎 い そろろ わ おん 知 知

なげき入って候えども、我が恩をばしりたりけりと、しら

そろろろ

せまつらんとために候。

たいめい はか しょうち 恥 もろ

「大名を計るものは小恥にはじず」と申して、

なんみようほうれんげきよう しちじ にほんこく 弘 したん こうらい

南無妙法蓮華經の七字を日本国にひろめ、震旦・高麗まで

およ 由 だいがん 孕 がん まん 験

も及ぶべきよしの大願をはらみて、その願の満ずべきしる

だいまうここく ちようじよう くに ひと

しにや、大蒙古国の牒状しきりにありて、この国の人ご

おお なげ そろろ にちれん さき

との大いなる歎きとみえ候。日蓮また先よりこのことを

勘 えんぶだいいち こうみよう

かんがえたり。閻浮第一の高名なり。

さき

憎

継子

高

名

先さきより憎にくみぬるゆえに、継子ままこの高こうみ名ようの高ように

専しん

もち

そうら

つい

み

歎

きわ

そうらうとき

せん心しんとは用い候もちわねども、終ついに身みのなげき極まり候時きわ

へんしゅう

いちじよう

変

そうらう

は、辺執へんしゅうのものどもも一定いちじようとかえぬとみえて候変。これ

だいじ

そうらう

しょうじ

もう

ほどの大事だいじをはらみて候そうらうものの、小事しょうじをあながちに申し

そうらう

候そうらうべきか。

とうじよう

にちれんこころ

しょうじよ

にほんこく

ただし、東条とうじよう、日蓮にちれんこころ心ざすことは生处しょうじよなり。日本国にほんこくよ

たいせつ

そうらう

れい

かんおう

はいぐん

重

思

りも大切たいせつにおもい候そうらう。例せば、漢王かんおうの沛郡はいぐんをおもくおぼし

しょうじよ

しょうち

あと

しゆ

めししがごとし。かれ生处しょうじよなるゆえなり。聖智しょうちが跡あとの主しゆと

知

にほんこく

さんじ

しゆ

なるをもつてしろしめせ。日本国にほんこくの山寺さんじの主しゆともなるべし。

にちれん

えんぶだいいち

ほけきよう

ぎようじや

てん

たも

日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。天のあたえ給うべ

理

きことわりなるべし。

こめいっとろくしよう

粟

こめにしよう

焼

ごめ

袋

米一斗六升、あわの米二升、やき米はふくろへ、それの

ひとびと

おんこころ

もう

尽

そうろう

みならず、人々の御心ざし申しつくしがたく候。これは

痛

思

そうろう

いたみおもい候。

のち

こころ

苦

思

そうろう

これより後は、心ぐるしくおぼしめすべからず候。よ

ひとびと

示

そうろう

ひとびと

伝

たま

く人々にしめすべからず候。よく人々にもつたえさせ給

そうら

きようきようきんげん

い候え。恐々謹言。

ないじ

乃時

べつとうのこぼうこへんじ
別当御房御返事